

日本がキリスト教を選ぶ日

アンディ美湖

チャペルウェディング・ブーム 宣教師はどう見る

キリスト教式結婚式の人気は爆発的に高まる中、多くの牧師、宣教師は単なる華やかなパフォーマンス以上のことを願っている。チャペルウェディングが流行する主な理由は、花嫁がウェディングドレスを着て、バージンロードを歩き、友人が見守る中、その日の女王になることのようなのだ。この浅薄な理由は牧師を残念がらせるかもしれないが、同時に、多くの牧師・宣教師が先例のない機会に、この願いをかなえようとしている。

チャペルウェディングの流行は、80年代に山口百恵や松田聖子がキリスト教式で行ったのに端を発した。今日、ブライダル雑誌、『ゼクシィ』によると、日本の結婚式の70%はチャペルウェディングで、従来の伝統的な結婚式を大幅に越えている。最近の花嫁は、レースの純白のドレス、輝く冠、花を好む。十二一重に身を包み、角隠しをするよりも。

殆どのカップルは聖書を一度も読んだことがないし、キリスト教式結婚式についてもあまり知らない。サモアからの宣教師、トーネ・ファヤラーガは、新婦の父親が花嫁に付き添ってきて新郎に引き渡すとき、花嫁のヴェールを上げてしまったので、笑いをこらえるのに息を止めなければならなかった。沖縄の宣教師サム・石川は花とキスに溢れるハワイで育ち、結婚式につきもののキスが、くすくす笑われたり、新郎新婦を極度に緊張させてしまうことが愉快である。キスを恐れて握手で済ますカップルもいる。

牧師・宣教師の中でも、このような結婚式を行うことに意見が分かれる。ある人は、何十年もキリスト教に抵抗があるこの国に、神が与えたチャンスだとみる。「もし、日本の教会が、この機会を捕らえ、教会で結婚したいという未信者の願いを大切に受け止め

たら、この国のクリスチャン人口は倍になっただろう。」と宣教師ジョン・ライトは言う。毎週日曜日に教会で礼拝する人の3倍近くの人がチャペルウェディングに集まっていることを考えると、この言及もまんざらではないかもしれない。

牧師・宣教師は、改心者が起されることを願うだけではない。日本における離婚率は、ここ10年以上毎年記録を更新していることを知り、結婚しようとする人に肯定的なインパクトを与えたいと願っている。日本が産業都市国家の中で、結婚における満足度が最も低い国の一つであることを考慮すると、離婚は今後さらに増加するように思える。2001年には政府の調査によって、5人に1人の女性が夫から肉体的な暴力を受けていることが明らかになり、長年待たれた家庭内暴力に対する法律が制定された。もし、結婚の祝福が夫婦生活ではかられるなら、残念なことに日本はここでも非常に低い割合である。去年の冬の『女性自身』によると、30代の夫婦の55%はセックスレスだという。

司式者に関して言えば、羊とやぎ（あるいは、羊の皮を着た狼）とを区別するのは、「結婚前のカウンセリング」であるようだ。本物の牧師・宣教師はカウンセリングを望んでいるが、なかなかホテルやウェディング取次ぎ会社の協力が得られない。それでカウンセリングが出来ないなら司式も行わない牧師たちもいる。大阪地区の宣教師は協力し合い、1時間のカウンセリングをしないなら結婚式を引き受けないと結婚産業に圧力をかけた。

結婚式の時間と礼拝の時間が重なることもあり、牧師は日曜日に結婚式を行うことができない。司式者の数が極端に足りなくて、教会ではなく、結婚産業がこの必要を満たすため動きだし、英語教師を雇っている。会社が全国的にチャペルを建て、ヴィクトリア時代の200あまりの英国国教会の遺物をオークションで買って、輸入する。チャペルウ

エディングには、2階建ての窓に掲げられた十字架のステンドグラス、賛美歌を歌う聖歌隊、講壇に開いた特大聖書、すべてがそろっている。牧師をふくむクリスチャンを除くすべてが。

最近までに、東京では、結婚取次ぎ会社が 500 人以上の按手をうけていない外国人と 200 人あまりの聖職者でない日本人を司式者として雇っている。ケニー・ジョセフはこの状況を嘆いて、「偽宣教師が我々の名に汚名を帰している。雑草を刈り取らねば。」と、故郷のシカゴに渡り、90 名のピンチヒッター・チャプレンを訓練し、結婚式を行う資格を与えられるよう働いた。また幸いにも、偽の牧師・宣教師を取り締まる法律が厳しくなった。宣教師ビザなしで結婚式を執り行くと、30 万円の罰金、3 年の投獄、又は国外退去が命じられる。

本物の宣教師に対する謝礼の誘惑も大きい。土曜日に、3 時間、3 つの結婚式をすると、司式者は、平均 55,000 円の謝礼が貰える。仕事もお金も非常に楽なので、多くの宣教師は結婚式だけに専念する。この流行に流れおおよそ 200 人の宣教師を失ったと、仙台のネイサン・マイケルセンは嘆いている。しかし「彼らはそこの方が良い働きなのかもしれない。」と付け加えた。メディアはお金か奉仕か、宣教師の動機を探るが、2000 もの司式をした、大分で働く南アフリカのフィリップ・ヴィッサーのように、多くの人には報酬を個人的に受け取らないで、ミッションの宣教活動費に直接送っている。

この現象は、宣教師の夢が現実になったものようだ：異教徒がチャペルを建て、多くの異教徒が集まり、説教して欲しいと懇願する。引退した宣教師ドイル・ブックは「神様は、世のお金で教会を建てている！こう考えると、感情を抑えられないほどだ。」と感嘆した。

この流行はいつまで続くのだろうか。ニュージーランドからきた 70 歳になる北海道の宣教師リチャード・グドールはウィットに富んでこう答えた。「この流行は、キリストが来られるまで、あるいは神主どもが、収入源が厳しくなりすぎたと気づくまで続くだろう。」

実質的な実は、わずかしかないと反対する人もいる。しかし、あちこちでインパクトは現れている。山形の教会に集う女性は、キリスト教について漠然とした概念を持つ前に、地域の牧師に結婚式をしてもらった。この司式に感動し、彼女は、後に洗礼を受けた。去年の夏、司式をした牧師は、彼女の改心を知ることもなく亡くなった。

今日、結婚がうまくいく見込みはどれくらいか。全国の宣教師は悲観的であるが、一つの点においては一致している：キリスト教式結婚式は、永久に残るものを得るための大切な一歩かもしれない。

トーネ・ファヤラーガ
サム・石川
ジョン・ライト
ケニー・ジョセフ
ネイサン・マイケルセン
フィリップ・ヴィッサー
ドイル・ブック
リチャード・グドール

Copyright © Andrew Leon Meeko 2003